春の特別展

美しき古都
伝統が奏でる幻想と静寂

2007年4月21日（土）～5月27日（日）

月篁 1967年（紙本彩色）東京国立近代美術館蔵

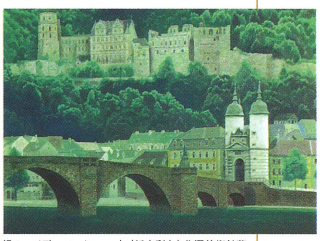
昭和37年の北欧旅行は、自然と人々の暮らしが密接に関係しながら共存していることに気付かされる旅となりました。川端康成の助言により、魁夷は北欧からの帰国後、頻繁に京都を描くようになります。魁夷は、失われゆく古都の風情に深く魅了され、昭和43年京都の四季を描いた一連の作品『京洛四季』を完成させました。さらに魁夷は、この『京洛四季』の取材をきっかけとして、ドイツ・オーストリアの古都を巡る旅に出て、美しい自然と永い歴史のなかで育まれたヨーロッパの風情を探訪しました。
本展覧会では、自然への共感と伝統的な習慣や風俗からなる東西両洋それぞれの国特有の風情を描き続けた東山魁夷の生命感あふれる風景画を紹介します。

秋の特別展

東山魁夷を中心に
日本画の精華／愛しむ風情とともに

2007年9月22日（土）～11月4日（日）

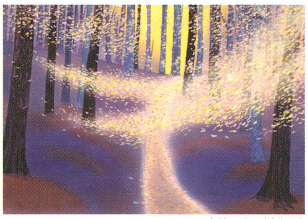
明治40年日本初の公募美術展覧会である文部省美術展覧会（文展）が開催されました。これを機に小規模の画塾は在野の美術団体として統合されるなど、大正から昭和にかけて美術は一般大衆への浸透が著しい時代を迎えました。こうした背景に基づいて日本画界では、近世以前にみられた美人画や風俗画など古典絵画の画題を踏襲しながら、静物画や自然観照に基づく風景画など新しいジャンルとしての日本画のスタイルが登場しました。画題は日本の情緒や風情に因んだ復古的なものに取材しながら西洋画の鮮やかな色調に感化されるなど、日本画に新たな情趣を見出しました。本展覧会では、東山魁夷を中心に日本画の構築に貢献した作家たちを紹介します。


緑のハイデルベルク 1969年（紙本彩色）北澤美術館蔵

◉第1期テーマ作品展　2007年6月1日（金）～7月16日（月・祝）

魁夷散策／道のある光景　1階展示室

画面にただひとすじの道だけを描いた代表作「道」は、魁夷自身の画業と人生の軌跡を象徴し、多くの人がそれぞれの想いを重ね合わせて共感を寄せました。魁夷は生涯、描くべき風景を求めて旅をし、険しい山路や異国の石畳、心和む畦道など幾多の道を歩み、時には豊かな感性で、魁夷だけの想像の世界も自由に散策したことでしょう。魁夷とともに風景の中を歩む気持ちに誘われる、道が描かれた作品を紹介します。


木枯らし舞う（木版画）

イメージする自然のかたち　2階展示室

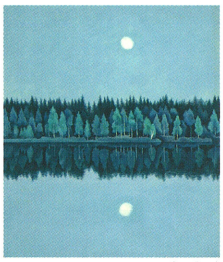
近代以降の絵画制作における“自然から学ぶ”という行為は、アール・ヌーヴォーやアール・デコをはじめ西洋美術の成り立ちにおいて欠くことのできない存在でした。自然の作り出す有機的な形状は作家によって誇張、単純化され、家具や食器などの意匠として生活の場面に浸透していきました。こうした自然から学ぶ造形表現は、のちにキュビスムやフォーヴィスムなどの平面作品にも応用され、構築的な絵画観を表出しました。魁夷は、ドイツ留学を機にこうした西洋の表現手法に感化されながらも、自然の持つ生命感や佇まいを尊重した日本画の創造的な表現を目指しました。

秋翳（リトグラフ）

◉第2期テーマ作品展　2007年7月19日（木）～9月17日（月・祝）

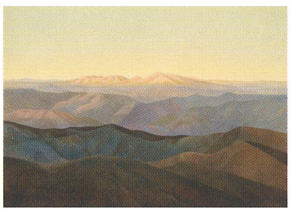
回想—北欧旅ものがたり　1階展示室

昭和37年54歳の春、画業は順調で多忙な日々を送る中、日常に埋没する危機感を感じた魁夷は、かねてより憧れの地であった北欧へ、3ヶ月間の写生旅行に旅発ちます。東京の雑踏から北欧の古き町に降り立った魁夷は、豊かな自然や清潔な町、親切な人々と出会い、懐かしさと安らぎに浸ります。魁夷が画家として大切な、新鮮な気持ちと心のゆとりを取戻し、大きな感動に満たされた北欧の旅を、帰国後制作された版画作品で辿ります。


二つの月（リトグラフ）

魁夷心象／心に映る追憶の風景　2階展示室

苦労時代を乗り越えて、戦後日本画の世界に彗星のごとく登場した東山魁夷。魁夷の自然に求める主題観は、常に自らが歩んできた人生というひとすじの道に通じています。幾たびの魁夷に降りそそいだ試練は、雄大な山々や何気ない風景の穏やかで静かな時間の経過に抱擁され、画面からは追憶のなかに潜む魁夷の心の声となって聞こえてきます。目の当たりにする自然の真の姿を捉えながら、それに逆らうことなく心の目でみようとする魁夷の絵画観を紹介します。


残照（リトグラフ）

◉第3期テーマ作品展　2007年11月9日（金）～2008年1月27日（日）

魁夷—四季変化　1階展示室

魁夷は、ある時、八ヶ岳の高原に気に入った風景を見つけ、「その同じ場所に一年のうち十数回行って、見覚えのある一木一草が季節によって変わって行く姿をじっと見守っていた」といいます。生々流転する四季の変化は片時も留まることがなく、限りある命を生きる私達と、何ら変わりのない姿を見せます。自然との巡り合いを「一期一会」とする魁夷が、一瞬一瞬の美しさと輝きを描きとめた四季折々の風景画を展示します。

秋耀（木版画）

森のささやき／白馬幻想　2階展示室

魁夷は特徴的な表現として、生命のあり様を目に見えるかたちで画面に登場させるという手法を用いています。その顕著な例として“白馬”が挙げられます。魁夷は、この白馬の登場を「ある時、一頭の白い馬が、私の風景の中に、ためらいながら、小さく姿を見せた。白い馬は風景の中を、自由に歩き、佇み、緩やかに走る。-後略-」と語っています。突然現われた白馬の存在は、生命の象徴として魁夷の心の奥に潜んでいたものでした。森からのメッセージを幻想的な白馬という姿に込めて伝えようとした魁夷の画境を紹介します。

白馬の森（リトグラフ）

◉第4期テーマ作品展　2008年1月30日（水）～2008年4月13日（日）

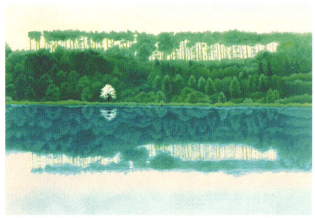
魁夷—夢の中／未知の国への誘い　1階展示室

東宮御所の壁画や唐招提寺御影堂の障壁画の制作は、魁夷にとってあらためて日本の自然環境の厳しい側面を知る機会となりました。その後しばらくの間は、そのような題材が魁夷の制作の中心を占めるようになりましたが、最晩年に至って、再び詩情溢れる幻想的な制作に取り組み始めました。場所も特定されない過去の記憶の中に存在する風景には、幼少の頃、好んで童話を読みふけったという魁夷の姿をみることができます。最後の日展出品作「月光」は、雪景色のなかにどこか妖精が舞い降りてきそうな気配が感じられます。

瀟江月明（木版画）

春に想う／自然の彩り　2階展示室

春は、生命の輝きを最も感じることのできる喜びに溢れた季節です。北国や高原の遅い春の訪れを魁夷は特に好み、厳しく長い冬を耐えた生きものが見せる美しい変化の兆しを、共に喜び、大きな感動をもって描いています。清らかさと力強さに満ちた、みずみずしい若葉の芽吹き、やわらかな蕾のほころび…。繊細な早春の風景から、爛漫と花咲き揃い、薫風に若葉そよぐ頃まで、明るく若々しい彩に満たされる季節、春を描いた作品を紹介します。


春映（リトグラフ）